

## ぽらべあへの想い



「ぽらべあってなんですか？」とよく聞かれます。あまり馴染みのない言葉かもしれませんが知ってる人は知っていると思います。

ぽらべあ=ポラベア=Polar Bear

そうです。ホッキョクグマという意味です。日本ではホッキョクグマ、というよりはシロクマと呼ばれることが多いですが、海外では決して White Bear とは言いません。

最近でこそ、ホッキョクグマは動物園、水族館で人気動物ですが、かつて日本の動物園ではどこの動物園にもいて、狭い檻の中で同じ場所を行ったり来たりの常同行動している…、そんなイメージがあったかと思います。しかし、海外ではイルカなどと同様に人気生物の一つで、広いスペースで比較的のびのびと飼われていることが多いです。日本ではその飼育頭数も年々減少傾向にあります。これは国内の繁殖例も少ない上に高齢化も進み、新たに入手するのも困難になってきているため、このまま進めば20年後は国内で生きたホッキョクグマが見られなくなってしまうかもしれません。海外のある自然保護団体は、日本のホッキョクグマ飼育環境はあまり適切ではないと指摘しています。これはそのまま鵜呑みにすることはできないものの、このような背景もあり最近では適切な飼育環境や技術のない施設にはホッキョクグマを輸出しないという国も出てきました。ただし、これはかつて私が水族館に勤務していた2004年頃のお話で、2023年現在、国内の動物園、水族館の飼育環境もかなり改善され、園館同士で積極的に繁殖計画を進めていると聞いております。

お話戻ります。そんな中、男鹿水族館(以下 GAO 画像1)はホッキョクグマ入手に取り組んでいました。当初はカナダで保護された野生個体を入手する予定で進めていましたが、そのためには施設の大きさや飼育レベルなど厳しい基準がありました。これをクリアするため施設は急遽増設されました。私が入るとすぐにホッキョクグマ担当に指名されました。というのもそもそもホッキョクグマを飼育するにあたって専属の獣医師がいなければいけないという規定もあったようです。そして2004年9月、カナダのケベック動物園というところで子供のホッキョクグマ2頭が保護されました。当時カナダのマニトバ州法の規格を何とかクリアしていた GAO はケベック動物園から譲渡候補先の一つとして指名されました。ケベック動物園の話では、施設も老朽化しておりこのまま飼育することは難しく、なるべく早く受け入れ可能な施設に搬出したいとのことでした。このとき、すでに1頭は既に豪州のシーワールドという施設に搬出が決定しており、残りの1頭を出す条件の一つとしてクマ2頭で飼育することが提示されました。GAO が残りの1頭を搬入するためには、もう1頭クマを入手しなければなりません。これはかなりの難題でしたが、その頃別ルートでメスのホッキョクグマ入手の話もあり、可能性のない話ではなかったのです。ただ、すぐにでも子グマ2頭を搬出したいケベック動物園の事情もあり、ひとまず2頭ともシーワールドに搬出し、その後改めてシーワールドから1頭 GAO へ送るということになりました。もちろんその頃にはもう1頭の方も話はついているだろうという見込みがありました。

まず、GAOに求められたものは、ホッキョクグマの輸送、飼育、トレーニング、獣医学などの知識と実践でした。そこでこれらの実際を学ぶため、獣医である私がカナダ・ケベック州のケベック動物園へ赴きました。海外の動物園は初めての私にとってそれは非常に驚きの毎日でした。ホッキョクグマも犬のようにトレーニングされていました。なぜクマにトレーニングが必要なのでしょう？一つは、健康状態を把握するためであり、ボディチェックや採血などを実施して健康診断に役立てたいというもの、もう一つはマンネリ生活に変化をつけて退屈させないようにするということです。特に後者は最近耳にする「エンリッチメント」という考えに基づいています。ここでいうエンリッチメントとは、毎日何かしらの変化をつけて（遊具をあげる、餌を隠す、展示場を入れ替えるなど）単調な生活から少しでも脱却させることで、少しでも豊かな生活を送らせようという考えです。なるほど人間でも毎日同じ空間に同じ時間に同じ食事では気が狂ってしまいますよね。野生ではありえない生活を展示動物は送っているのです。そのことに今更ながら再認識させられました。また、動物園の2名の獣医には、ホッキョクグマに関する栄養学的なことから麻酔に至るまで、基本から丁寧に指導して頂きました（画像2）。

カナダ研修も無事終わり、ホッキョクグマ受け入れ準備も具体性を増してきました。そんなある日、搬出先のシーワールドのCEOから連絡がありました。そこでは、搬出も無事終了した2頭の子グマは施設に慣れてきており、もし現時点でGAOの別ルートの子グマの手配がまだであるのなら、GAOへ搬出せずこのまま2頭で飼育したいというものでした。残念ながらこの時点でもう1頭の入手話は泥沼化しており、進展は見られませんでしたので、結果的にその2頭の子グマはそのままシーワールドで引き取ることになってしまいました。これでまた話は振出しに戻ってしまいました。しかし、彼はその代りシーワールドで独自にもう1頭手配していたホッキョクグマをそのままGAOへ譲っても良いと言ってきました。そのためには、獣医師がシーワールドのホッキョクグマ施設と飼育状況、獣医学などを学びに来て欲しいという条件がつけられました。GAOにとっては願ってもない機会です。もちろん返事はOKで、私はそのまま豪州へと送り込まれることになりました。前回のカナダ研修の際、そのシーワールドの女性スタッフも現地にきており、そこでいろいろと交流が持てたことも功を奏したのかもしれませんが、これが2004年12月のことです。

豪州のシーワールドは、サーフィンなどでも有名なゴールドコーストにあり、水族館と遊園地が一体となったような巨大海洋テーマパークでした。主な海獣類はホッキョクグマ、イルカ、ジュゴン、オットセイ、アシカ、アザラシなどが展示されており、中でもホッキョクグマ施設は、最近改修したばかりの広大で斬新な屋外施設（画像3）でした。ゴールドコーストは年中通して暖かい気候で、実際現地に行ったときは真夏でかなり暑かったのですが、展示場のクマは活動的でバテたり、常同行動はほとんど見当たりませんでした。これは、少しでも暑さを和らげるために展示場内に霧を噴射させたり、屋根をつけたり、冷水の滝を流したりと施設面での様々な工夫と飼育面でのケアが十分行き渡っている証拠だと思います。実際、展示場内で活発に遊ぶ2頭の子グマをみたとき、「この子たちはここで良かった」と痛感させられました。カナダのときも驚きでしたが、ここではさらに積極的なトレーニング、エンリッチメントが行われており、それらが最終的に獣医療へと繋がっていました。スタッフ間で常に連携がとれており、学ばされることが多かったです。このようにシーワールドでの研修があるのも先のカナダ研修があったからこそで、人と人の繋がりの大切さ、重要性を改めて実感しました。

豪州帰国後、話は一気に進みました。シーワールドとは友好協定を結び、GAOでの受け入れ態勢も着々と進みました。そのシーワールドから紹介されたクマがロシアのモスクワ動物園 2003 年 11 月生まれのオス、「豪太」です。開館から約 1 年後の 2005 年 6 月 6 日、彼は約 15 時間のフライトを終え日本に上陸しました。その後、特別な輸送車で東北道を約 12 時間走り、GAO へ無事到着しました。その後、豪太は少しずつ新しい飼育環境にも慣れ、順調に育っていきました。私が GAO を離れた後も、素晴らしいスタッフと優しい秋田県民の皆さんに支えられながら毎日元気に暮らしていたようです。

あれから随分月日経ちました。豪太は、国内動物園の繁殖プロジェクトにより、2023 年 6 月現在ですでに 2 頭の子供の父親になったそうです。なんと私と同じではないですか！19 歳になる今も大きく体調を崩すこともなく元気なようです。私は時々遠く男鹿の地で毎日充実した日々を過ごしているであろう豪太の姿を思い浮かべます（画像 4）。

「豪太よ、こちらはついに新しい病院ができたよ。あの時は何もできなかったけどいつかお前の身に何かあった時は、少しでも治療に貢献できるような知識と技術は身につけたつもりだよ。お前がいつも健康に暮らせるようここから見守ってるよ。」と思いながら・・・。

最後まで読んで頂き、ありがとうございます。私が水族館勤務から小動物の病院へ転職するきっかけになったのは、米国獣医歯科専門医の先生に水族館動物を手術してもらう機会があり、その施術を目の当たりにして衝撃と感銘を受けたことによります。その先生の影響もあり、獣医歯科を学ぶようになり、現在に至ります（この話をすると長くなるのでこの辺でやめておきます・・・）。「ぼらべあ動物病院」という名称は、もしいつか自分で開業するようなことがあれば、これにしようと長年なんとなく温めていた名前です。今後も名称ともども末永くよろしく申し上げます。

ぼらべあ動物病院 院長 中田朋孝

【画像】



1 男鹿水族館 GAO (2004年8月頃)



2 ケベック動物園にて (2004年10月頃)



3 シーワールドのホッキョクグマ施設  
(2004年12月頃)



4 ホッキョクグマ「豪太」 (2006年6月頃)